



## 高崎経済大学地域科学研究所 ニューズレター No.19

目次	所長挨拶	(1)
	事業報告① 第5回あすなる市民ゼミ	(1)
	事業報告② 第12回地域めぐり	(2)
	事業報告③ 第17回公開講演会	(5)
	事業報告④ 第11回地元学講座	(6)
	地域科学研究所動静	(12)
	編集後記	(12)

### 所長挨拶

地域科学研究所長 高松 正毅

本ニューズレターには、高崎経済大学地域科学研究所の事業のうち、第5回あすなる市民ゼミ、第12回地域めぐり、第17回公開講演会、第11回地元学講座の四つの事業について、その概要報告等を掲載いたしました。是非、ご一読ください。

世はいまだにコロナ禍から脱却することがかなわず、すべての事業の実施運営にあたり受講者数に上限を設けるなど、不如意かつ不本意な状況が続いております。少しずつでも元に復すべく尽力しておりますが、市民の皆さまには、まだまだご不便をおかけするかと存じます。なにとぞご理解のほどを、よろしくお願い申し上げます。

市民の皆さまには、今後とも、当地域科学研究所の事業に積極的にご参加いただくとともに、より一層のご理解とご協力を引き続きお願いする次第です。

\* \* \*

### 事業報告① 第5回あすなる市民ゼミ

2018年より始まったあすなる市民ゼミも、今年度で5年目を迎え、市民の皆様を中心に幅広い受講者によって、活況を呈するようになってきた。その過程で多様な議論も展開され、担当者である大学教員自身も、様々な形で勉強させてもらう機会となっている。その点、本講座

は地域科学研究所が主催する事業のなかでも、満足度の高い講座とすることができるであろう。担当者自身も、普段とは違う環境に緊張しながらも、時間をかけて市民の皆様とじっくりと議論ができる点で、担当することを楽しみにしているものの一つである。

2022年9月15日に開催された市民ゼミでは、「観光を通じて、私たちはいかに地域社会を形作ってきたのか?」というテーマで、『外国人が見た日本:「誤解」と「再発見」の観光150年史』(中公新書)を題材に、議論を進めていった。担当者としては、COVID-19によって一時的に外国人観光客がいなくなった時だからこそ、外国訪問者たちの「まなざし」を利用しながら、日本社会がいかに自らを語ってきたのか、受講者とともに考えていきたいと思った点が、本市民ゼミの目的としてあった。

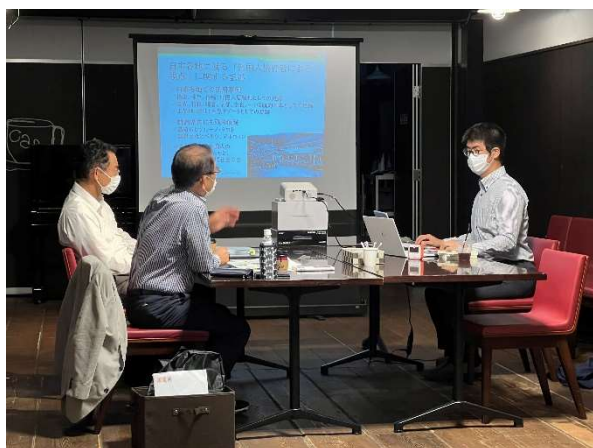
私たちが観光を考える際、普段の生活のなかで触れる何気ない光景や習慣が、外国人という部外者の「まなざし」に触れていくなかで、「観るに値するもの」として表象されていくことがある。そうした現象が、明治期から現在に至るまでの日本社会のなかでは、あらゆる場面で展開されている点を、市民ゼミのなかでは議論していった。その過程で、「外国人」が日本社会のいかなる点に反応するのか、時代的差異や地域的差異がある一方で、「外国人のまなざし」を活用しながら、日本における観光や日本社会そのものが発展してきた点は、時代や地域

を超えて共通していることを確認した。

当日参加した受講生2名と議論をしていく過程で、「外部のまなざし」は何も日本と外国という対比だけでなく、日本国内の都市と農村をはじめ、世代や社会階層といった形で、あらゆる場面でみられる点が明らかになっていった。また、現代における「おもてなし」に見られるように、日本社会が「外国人のまなざし」を内面化していく過程で、私たち自身が日本社会を本質的に理解していく点についても、活発な議論が展開された。

担当者としては、当日の議論だけでなく、事前・事後レポートを通じて、様々な形で受講者との間で議論をする機会や、フィードバックを得る機会に恵まれた。その点、担当者が受講者以上に、学びとして得るものが多かった時間であったと感じている。

また、様々な社会的背景を持つ受講者が一同に集い、1つの書籍を題材にじっくりと議論していく環境は、普段の大学における学びとは異なった展開を見せてくれる。受講者たちがそれぞれの人生経験のなかで積み重ねてきたさまざまな知見や逸話を共有していく過程で、普段の生活のなかではなかなか味わえない、知的好奇心を大いに刺激されたと感じている。



〈市民ゼミの様子 講師：安田 慎 所員〉

来年度以降も、市民の皆様とともに、多様な議論が展開されていくことを、地域に根差す公立大学の教員として願ってやまない。

安田 慎 (地域政策学部 准教授)

## 事業報告②第12回 地域めぐり

第12回地域めぐりは、高崎市倉渕町、高崎市榛名地区をフィールドとして実施された。当日は秋晴れに恵まれ、16名(市民8名、本学学生8名)の参加者は、烏川上流域の歴史と役割について熱心に学んだ。



### 〈倉渕町から見た西毛の山々〉

テーマの第一は、明治維新时期に高崎で起こった二つの悲劇の内の一つであり、日本史の教科書には書かれてこなかった小栗上野介忠順公の偉業を知っていただくこと、第二は、1992年以降、国の農業政策は、グローバル化に対抗可能な日本農業の大規模化に舵を切り、小規模零細な中山間地域農業が見捨てられてきた中、倉渕町の山間部で35年にわたって取り組まれてきた有機農業の成果を知っていただくこと、第三は、1970年頃からの養蚕不況に農家に対応した成果の一つである榛名地区の果樹農業の現状を知っていただき、そして第四に、高崎市民の飲み水、産業の育成のために果たしてきた烏川上流地域の役割を知っていただくことにあった。

案内者である私自身、1868(慶応4)年に幕臣・小栗上野介忠順が1827~1868)が西軍によって倉渕の烏川河畔で斬首されたことを、高崎に来るまで知らなかった。小栗公は、1860年1月、日米修好通商条約の批准書交換のため、遣米使節団の監察役として日本初の公式渡米を行った。アメ

リカで大歓迎を受け、小栗はアメリカの諸制度、諸技術を日本の近代化に活用しようと考えた。実際に小栗公は、1865(慶應元)年にフランス人技師を招聘して横須賀造船所を建設し、造船所の設計、建設技術は官営富岡製糸場の建設にも生かされ、造船と船の保守技術は、後の日露戦争でも活かされた。このほか、小栗公は洋式陸軍制度の導入、仏語伝習所開設、日本最初の株式会社「兵庫商社」の設立指導、鉄鉱山開発(下仁田町中小坂鉱山)、水洗トイレ付きの株式会社築地ホテルの設立指導、郵便制度、電信制度、ガス灯、鉄道などの導入に尽力したとされる。



＜村上泰賢先生の話聞く参加者＞

幕臣であった小栗公は、鳥羽伏見の戦いで密かに江戸に戻った将軍・徳川慶喜に主戦論を提案するも罷免され、知行地の一つであった倉淵に移住して、静かに生活を送っていたが、1864年閏4月5日、西軍に捕らえられ、翌6日に斬首され



＜はまゆう山荘の食事＞

た。こうした歴史は、高等学校で使用している日本の教科書には一切書かれていない。倉淵村では、小栗公を讃えて、大正時代から横須賀と交流を続けている。こうした歴史について、小栗研究の第一人者であり、小栗公が眠る曹洞宗・東善寺のご住職・村上泰賢先生からお話を聞いた。多くの高崎市民の方々に知っていただきたい歴史である。昼食は、倉淵村と横須賀市の交流が縁で倉淵に建設された、はまゆう山荘でいただいた。

はまゆう山荘から権田に戻る際、烏川の源流域に計画されたものの中止された群馬県営・倉淵ダムの建設予定地跡をバスで通って、鳴石地区に展開している、くらぶち草の会へ向



＜倉淵の山林＞

かった。1988年にスタートした有機農業グループ・くらぶち草の会(以下、草の会)は、榛名山西麓の鳴石集落の標高400mから900mの緩斜面を利用して、43名の会員によって有機農法による農産物生産を行っている。代表の佐藤茂氏から、開始当初の苦労話、35年の歩みと現状、課題のお話をいただいた。

佐藤氏が有機農業に取り組んだのは、父親から農業を引き継いだ際、市場出荷に依存しては農業に夢が持てず、「夢の持てる農業」を模索したことにあった。その答えは「自分で価格が決められる農業」であり、有機農法による野菜づくりを、同じ集落の農家にも声を掛けて、1988年に4世帯でスタートし、草の会を結成した。現会員43名の内、28名は、群馬県、東京都、千葉県、神奈川県、宮城県、富山県、高知県からの移住就農者。15戸は倉淵地域の農家であり、草の会の活動に刺激されて、有機農業栽培を行うようにな

った。驚くことは、鳴石の耕作放棄地率がゼロとなっていることである(筆者の調査による)。国の農業政策は大規模化に傾斜しているが、小規模でも契約農業、集合的営農によれば耕作放棄地が発生せず、農業の多面的機能が発揮されていることを実証している点は注目される。



〈くらぶち草の会・佐藤茂氏の話聞く参加者〉

最後に、旧榛名町上里見地区の榛名の梅の経営者・清水重信氏から、養蚕衰退から梅栽培に至る歴史を学んだ。旧榛名町は、わが国でも有数の梅産地として知られ、里見地区はナシの栽培でも知られている。かつて養蚕が盛んであった群馬県南西部の山村では、養蚕衰退期に桑園跡に当時は高値だったスギの造林を進めた。しかし、その後の林業不況によって木材価格が低下したこともあって集落では限界化が進んでいる。これに対して、旧榛名町の多くの集落では、桑畑の減少に合わせて果樹園の面積が増加し、後継者の育成も行われてきた。群馬県の梅栽培は、和歌山県に次いで第二位の地位にある。梅の需要は、おに



〈梅栽培加工農家 清水重信氏より話を聞く参加者〉

ぎりの具としての需要をはじめ、日本人の食生活には欠かせない食材となっており、榛名地区は日本の梅栽培の一翼を担っていることを学んだ。

高崎市は、1972年から、高崎市の水道水源となっている倉淵村の水源林に毎年、水源林の管理費用を支払ってきた歴史があり、この歴史は都市山村交流の方法として注目された。高崎市剣崎浄水場、若田浄水場の緩速濾過方式によって市民、企業に提供されてきた高崎市の水道水は全国でも指折りの良質の水と評価されている。この良質の水は、高崎市を貫流している烏川上流域の様々な営みによって育まれていることを学んだ。

以上より、2006年に高崎市に合併した旧倉淵村、旧榛名町には、近代日本形成に貢献したものの日本史には紹介されない重要な歴史があり、農業の営みは中山間地域の多面的機能を維持することに結びついて、烏川下流に集中している高崎市民の命と財産を守る役割を果たしていることを学んだ。新型コロナウイルス感染防止の観点から定員を半減させての実施であったが、こうした烏川上流域の歴史と役割を多くの市民に知っていただきたく、地域めぐりプログラムの一つとして繰り返し実施されることが望まれる。

今回の地域めぐりの実施に当たり、東善寺ご住職・村上泰賢先生、くらぶち草の会代表・佐藤茂氏、清水の梅代表・清水重信氏、はまゆう山荘に格別のご高配をいただいた。記して、感謝申し上げます。

西野 寿章 (地域政策学部 教授)

## 事業報告③ 第17回公開講演会

地域科学研究所の第17回公開講演会として、観光地域プランナーとして全国各地の観光まちづくりに関する調査や実践的助言を行いながら、大学にて観光学の教鞭をとられている上村基先生を講師にお迎えし、令和4年10月14日金曜日に実施した。論題は、「コロナ禍における持続可能な観光まちづくり」である。

本講演会の導入では、公演論題にもある「持続可能性」を検討する際に、近年各分野に導入されているSDGs（持続可能な開発目標）と観光との関係性について解説した。SDGsは、貧困・気候変動・人種やジェンダーに起因する差別など、世界が直面する様々な問題・課題に対して「誰ひとり取り残さない」という共通理念のもとに設定された2016年から2030年までの国際目標である。取り組み背景として地球の限界（プラネタリー・バウンダリー）があり、人間が環境保護や人権を考慮せず、利益を追求して野放図に振る舞い続けられれば、世界が立ち行かなくなるため、観光を含めたあらゆる分野で実践する重要性を提示した。

つづく、「観光の環境への貢献」において、観光行動は環境負荷の高い活動であり、本来観光と環境は相容れないものであると指摘する。とくに力説されていたのは、「観光地は“すり減る”（≒消費される）」ということである。それは、観光地を訪れる多くの観光客によって、地域の観光資源は物理的にだけでなく、文化的側面、人的資源などあらゆる価値が次第に消費されてしまうということであり、その価値を持続するために常に「補修（メンテナンス）」が必要であると述べた。

こうした状況に対して、コロナ禍以後の観光においていかに「持続可能性」を取り入れた観光まちづくりが重要かについて、最新の情勢とともに氏は言及する。コロナ禍において、各観光地における危機管理体制の確保・充実の必要性が改めて



＜第17回公開講演会 上村基先生＞

認識された。そして、感染拡大が終息した後を見据えれば、危機を乗り越えていけるだけの対策と地域が一体となって取り組むことができる体制があるかが重要であると指摘する。危機を耐えしのぎ乗り越えていく、まさに「持続可能」な観光地域づくりが重要であり、SDGsから地域を俯瞰することでこれまでの視点では発見できなかった新たな課題、異なる課題の関係性の発見やチャンス発見につながるとしている。

結びとして、観光を通じた地域の持続可能な経済発展のためには、本物の観光事業の提供によって、豊かな自然環境、伝統文化、食、伝統工芸などの地域資源を“観光資源化”しなければならないとした。本講演で紹介されたサステナブルツーリズムをはじめとした地域の実践事例を通じて、持続可能な観光地域や観光事業の将来像を垣間見ることができた。これらの事例からは観光事業者や地域住民のアクションのみならず、来訪者（観光客）の協力が必要不可欠であり、従来型の観光サービスからの転換とともに、観光客側もその楽しみ方や関わり方の転換を促すような重要な示唆に満ちているものであった。

片岡 美喜（地域政策学部 教授）

## 事業報告④ 第11回地元学講座

観光者や新参者にはその重要性がほとんど理解できない場所が、地域住民にとっては特別な場所だと感じられることがあります。存在していた構築物が破壊されたり解体されたりして全く異なる空間になっても、特定の人々にとっては大切な場所であり続けることもあります。かつて「カップピア」と呼ばれる遊園地があった場所、現在の「高崎市観音山公園」が、まさにそうではないでしょうか。

カップピアとは、地域住民であれば保育園・幼稚園・小学校の遠足や育成会・子供会の写生大会などで、あるいは家族や親戚、友人、恋人、同僚たちと一緒に、一度は訪れたことがあるに違いない通過儀礼のような場所です。白衣大観音を近くに見ながら、一年を通じて様々な花が代わる代わる咲き誇り、夏にはプールとビアホール、冬にはスケートリンクが大いに賑わい、地元アイドルグループや芸能人のコンサートがさらに人を呼び、結婚式場や動物園まで備わっていた総合レジャー施設、それがカップピアでした。

カップピアは惜しまれながら2003年11月に閉園しましたが、しばらくして高崎市営の「観音山公園」として整備されました。そして、南東部分の丘が2016年3月に「ケルナー広場」として再生され、2年後にはカップピアの遊戯機械をイメージした木製遊具が設置されました。その場所は「観音山ミニ」と名付けられました。



<第11回地元学講座 続木 美和子 先生>

今回の地元学講座では、NPO 法人「時をつむぐ会」の代表理事である続木美和子氏を講師に迎え、ケルナー広場が開園するまでの経緯、「観音山ミニ」を設置するために来日したケルナー氏らの1週間、ケルナー広場の遊具の魅力、そして実際に遊具で遊ぶ子どもたちのはつらつとした姿を動画や写真とともに紹介していただきました。

ケルナー広場には、長さが10メートルもあるトンネル型の滑り台や、童話「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家をテーマにした高さ5メートルの複合遊具などがあります。どれも形がヘンテコで個性的です。ケルナー社の遊具は不均衡で斬新なデザインと構造が特徴であり、子どもたちが自分で遊び方を創造し工夫する仕組みとなっています。たとえば、滑り台の階段が斜めで、のぼり棒がぐらぐら揺れるなど。ですが、危険に感じるこのつくりが子どもの冒険心を駆り立て、危険予知能力や事故回避能力を高め、体力や運動能力の向上をも促すそうです。確かに、動画に映し出された園児たちは、トンネル型の滑り台から大きな声を出しながら滑り降りてくると、休む間もなく走り出して階段を駆け上がり、再び滑り台の上に立つという遊びを何度も何度も飽きずに繰り返していました。疲れを感じないくらい、本当に面白いのでしょう。

時をつむぐ会は、絵本や児童文学を通じて「子どもの健やかな成長」と「地域文化の向上と発展」を目指し、会報の発行、勉強会、子育て支援など、次の世代を担う子どもたちを育むための環境づくりに熱心に取り組んでいます。子育ては、正解のない日々の営みですが、子育て中はみな、それぞれに異なる悩みを抱えていると思います。そのような方をサポートする活動に力を入れているそうです。大人と子どもの両方が元気になれる場所がケルナー広場だと感じました。

小牧 幸代 (地域政策学部 教授)

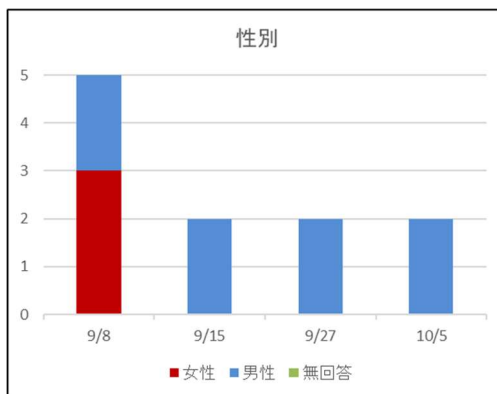
《第5回 あすなろ市民ゼミ : アンケート結果》

○各回のゼミ終了後、アンケート用紙を渡し、 구글フォームまたは紙にて回収 (回収率 91.7%)

問1. ご自身についてお答えください。

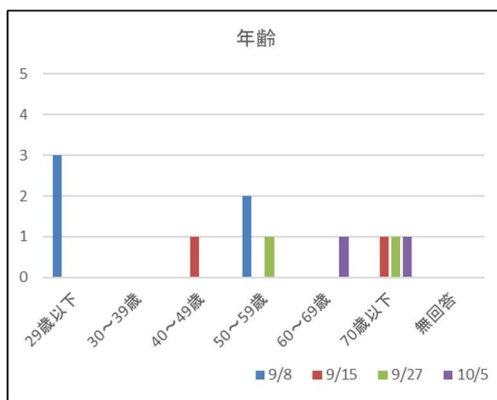
【性別】

	9/8	9/15	9/27	10/5
女性	3人			
男性	2人	2人	2人	2人
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



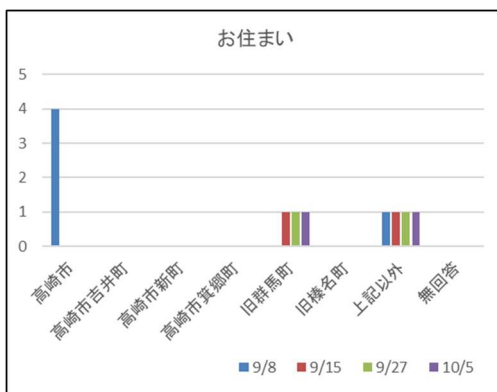
【年齢】

	9/8	9/15	9/27	10/5
29歳以下	3人			
30~39歳				
40~49歳		1人		
50~59歳	2人		1人	
60~69歳				1人
70歳以上		1人	1人	1人
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



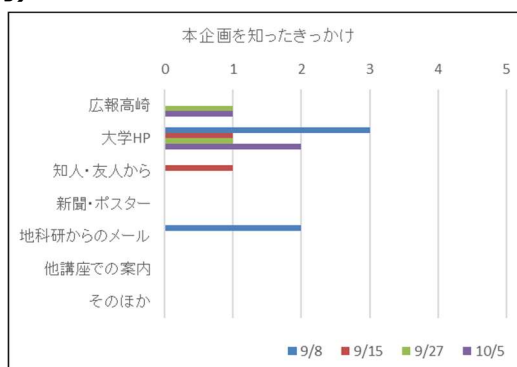
【お住まい】

	9/8	9/15	9/27	10/5
高崎市	4人			
高崎市吉井町				
高崎市新町				
高崎市箕郷町				
高崎市群馬町		1人	1人	1人
旧榛名町				
上記以外	1人	1人	1人	1人
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



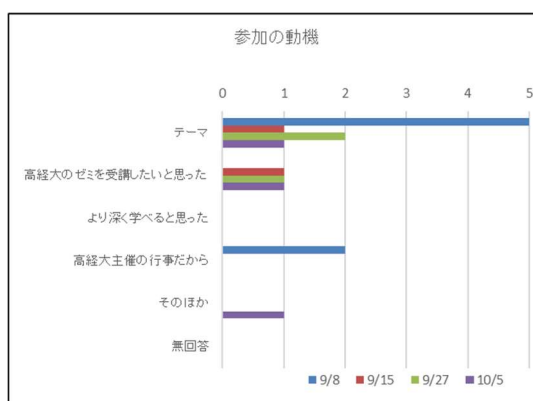
**問 2. 本企画をどこでお知りになりましたか (複数回答可)**

	9/8	9/15	9/27	10/5
広報高崎			1人	1人
大学HP	3人	1人	1人	2人
知人・友人から		1人		
新聞・ポスター				
地科研からのメール	2人			
他講座での案内				
そのほか				
無回答				



**問 3. 受講された動機をお聞かせください (複数回答可)**

	9/8	9/15	9/27	10/5
テーマ	5人	1人	2人	1人
高経大のゼミを受講したいと思った		1人	1人	1人
より深く学べると思った				
高経大主催の行事だから	2人			
そのほか				1人
無回答				

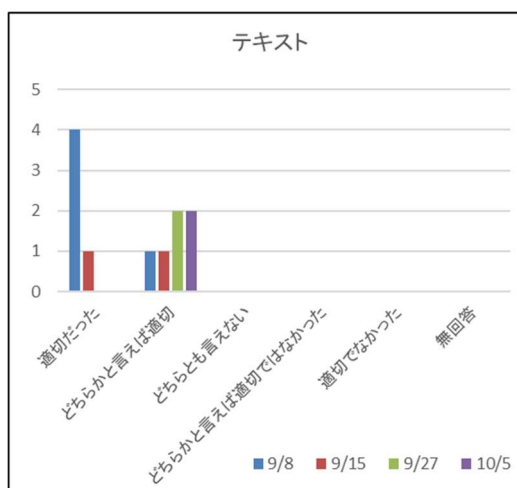


そのほか・・・高経大教授と対面ゼミができることと、参加者との意見交換ができると思ったから

**問 4. 受講された感想をお聞かせください。**

**(1)テキストは適当でしたか**

	9/8	9/15	9/27	10/5
適切だった	4人	1人		
どちらかと言えば適切	1人	1人	2人	2人
どちらとも言えない				
どちらかと言えば適切ではなかった				
適切でなかった				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人

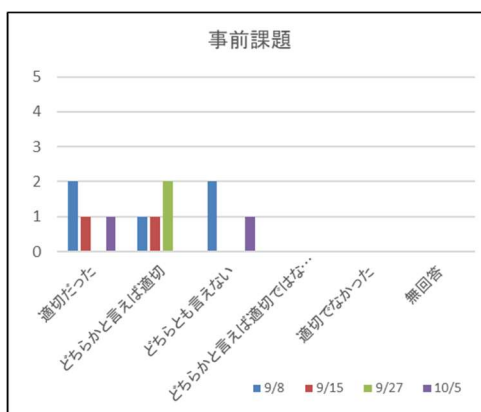


・事前にテーマに関する理解を深められたからです。



**(2)受講前の課題は適切でしたか**

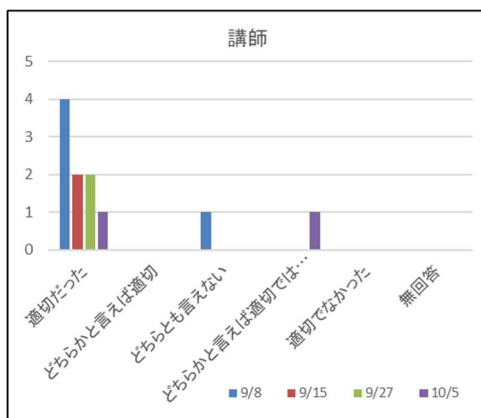
	9/8	9/15	9/27	10/5
適切だった	2人	1人		1人
どちらかと言えば適切	1人	1人	2人	
どちらとも言えない	2人			1人
どちらかと言えば適切ではなかった				
適切でなかった				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



- ・ 課題があることにより、事前に自分の意見を考えられたからです。
- ・ 書籍に纏わる、社会企業家云々に限定した議論を前提にしたことにより矮小化された議論になる
- ・ 可能性があったので俯瞰しての人物像とした方が意見の拡張が出てきたのかと。

**(3)担当講師のゼミ授業は適切でしたか**

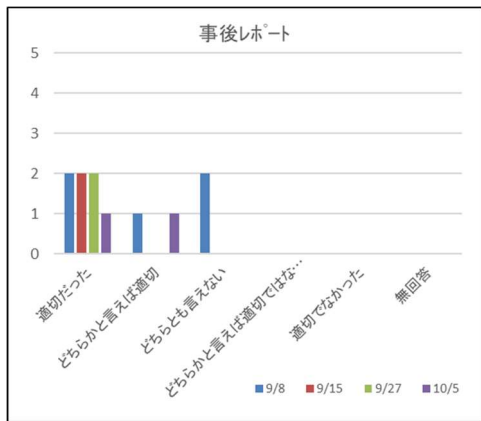
	9/8	9/15	9/27	10/5
適切だった	4人	2人	2人	1人
どちらかと言えば適切				
どちらとも言えない	1人			
どちらかと言えば適切ではなかった				1人
適切でなかった				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



- ・ テーマに沿って活発に議論ができたからです。
- ・ 渋沢栄一は嫌いという個人的意見は披露しない方が良かった。

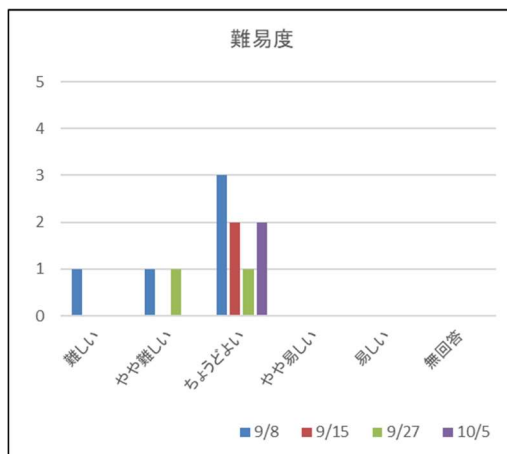
**(4)事後レポートの課題は適切でしたか**

	9/8	9/15	9/27	10/5
適切だった	2人	2人	2人	1人
どちらかと言えば適切	1人			1人
どちらとも言えない	2人			
どちらかと言えば適切ではなかった				
適切でなかった				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



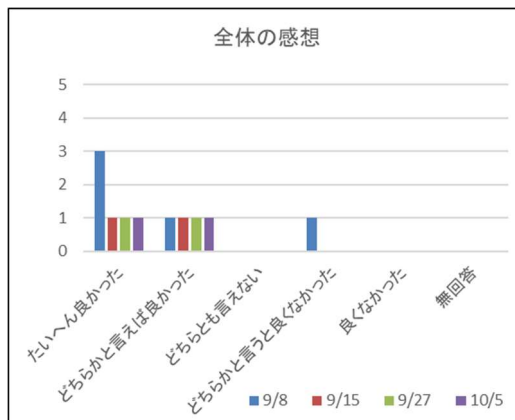
**問 5. 受講された市民ゼミナールの難易度についてお聞かせください。**

	9/8	9/15	9/27	10/5
難しい	1人			
やや難しい	1人		1人	
ちょうどよい	3人	2人	1人	2人
やや易しい				
易しい				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



**問 6. 受講を終えられての市民ゼミナール全体の感想**

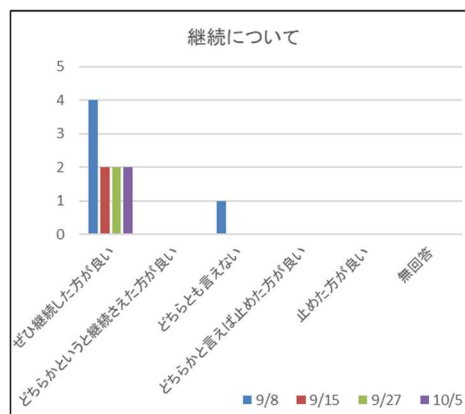
	9/8	9/15	9/27	10/5
たいへん良かった	3人	1人	1人	1人
どちらかと言えば良かった	1人	1人	1人	1人
どちらとも言えない				
どちらかと言えば良くなかった	1人			
良くなかった				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



- ・自分だけで考えるのではなく、複数の人と考えを共有し議論することで、テーマに関して理解が深められ有意義な時間となりました。
- ・方向性が違っていた。
- ・いろいろな人の意見（教授含め）の交流が出来た事に感謝します。

**問 7. この市民ゼミナールは、今後も継続した方がよいですか**

	9/8	9/15	9/27	10/5
ぜひ継続したほうが良い	4人	2人	2人	2人
どちらかと言うと継続させたほうが良い				
どちらとも言えない	1人			
どちらかと言えば止めたほうが良い				
止めたほうが良い				
無回答				
合計	5人	2人	2人	2人



- ・同年代の方だけでなく、幅広い年代の方々と考えを共有することができるからです。
- ・各人のとらえ方ががあるので、どちらとも言えないです。
- ・教授と対面で議論できるまたとない機会となるので。

**問 8. 市民ゼミナールで取り上げると良いと考えられるテーマがありましたら、教えてください。**

- ・外国人児童生徒の教育
- ・「市民と学生が結ぶひらかれた大学」という視点はいかがでしょうか。大学教授、今時の学生って怖そう、偉そう、気難しそう、何教えてるのかしら？一般市民はそういうイメージだと思う。学園祭だけではなく、街のテーマを「学生の研究」に吸い上げてもらう意味でも「行政に要望してみたいこと」を意見交換会方式でもいいと思いました。
- ・各分野「自然科学系」が良いと思います。
- ・地域の参加型社会活動, SDG s の実践
- ・まちづくり・市民協働・生涯学習
- ・地域活動の取組
- ・群馬県における官民協業の現状と課題
- ・群馬県の産業の発展
- ・今回の人物像で言うのなら、京セラの稲森和夫さんがよろしいと思われます。

**問 9. 高崎経済大学の市民向け事業全般について、ご意見がありましたら、お聞かせください。**

- ・前述したようなことと、普段の講義授業では教壇上の1対何十人という教授と学生ですが、カジュアルな場所でお話してもらえる距離感は意義深いと思いました。講師の先生にはお手間ですが、授業ではもらえないテキストの特別感や聞けない話をしていただけることは貴重な機会です。
- ・ディスカッション形式でなく講義式のように思えます。最初にレポートに意見を求めているそれらの内容でするのであれば、ディスカッションはなくて良いと感じます。
- ・継続的に開催を希望します。
- ・大変良い内容でした。県内市外の方がこうしたことを知るともっと参加者が増えると思います。
- ・良い講座なので、市民の方が多く参加できるように広報活動をしてほしい。
- ・テーマや講座の生は良い先生ばかり、もっと広く広報活動されると良いと思います。

### 地域科学研究所動静

・地域科学研究所紀要『産業研究』第58巻第1号を発刊しました。今号では、論文3本、研究ノート1編を掲載しました。本学ホームページ（リポジトリ）よりご覧頂けます。

### 編集後記

今年度の地域科学研究所の事業は、一部で参加人数の制限を行ったものの、ほぼ通常の形で実施できるようになってきました。参加される方も年配の方だけではなく、留学生を含めた学生や社会人、高崎市外の方もおり、その多様性は、地域科学研究所の事業が長年継続して事業を実施してきたことで、より多くの人にその価値を認知されている賜物なのではないかとあらためて実感しました。

一方で、コロナ下での外出を控えている市民の方も多くおられるようにも思われ、研究所で行っている事業や研究をどう広く発信していくか、対面でのアプローチだけではなく、SNSなどのデジタルツールの活用を含めて、より多くの方に学習の機会や情報を提供するにはどうしたらよいか、今後、検討していく必要があるのではと考えております。

地域の方の関心と本学の教員の知見をしっかりと結び付け、知の拠点として地域に貢献できる事業を展開できるよう、今後も尽力していきたいと思えます。（ST）

高崎経済大学地域科学研究所

ニュースレター No.19

発行 2023年1月5日

群馬県高崎市上並榎町 1300(〒370-0801)

TEL(027)344-6267 FAX(027)343-7103

E-mail : chiikikagaku@tcue.ac.jp

©TIRS